京城日報
號外
昭和七年一月六日
（明治卅九年八月十日第三種郵便物認可）
發行所 京城太平通一丁目
合資會社 京城日報社
光化門局四百番
振替京城二〇〇
編輯兼發行人 中野紫夫
印刷人 小川三之介

見よ錦州一番乘り朝鮮軍

記事＝佐藤本社特派員 ——◦—— 寫眞＝河野本社寫眞班長

入城一番乘りの朝鮮軍に隨伴して

錦州にて 佐藤特派員

九月十八日滿洲事變突發してより三月余、遂に錦州入城の日は來た。あゝ！滿蒙問題最後の幕よ！匪賊の見張所と、張學良の断末魔を殺すべき日は來た。全滿三千萬民衆の喜びの叫びを實現すべくその幾瞬を待つくことなき匪賊の巣手より、要すべき今日支人を救ふべき大使命を擔つて第〇〇師團〇室師團長は二日午前十一時四十五分奉天を出發、一路錦州へと向つた、すは遅れてはならじと記者はしばし奉天に別を告げ河野寫眞班長とゝもに何にもかも打棄てゝ列車にとび乘つた、錦州城への

＝一番乘り＝だ、この榮譽をはづして何んとしよう、貨車の中にわれ〳〵はひた走りに奉天驛にかけつけた

一

奉天市民の血の出る樣な歡聲に送られて軍用列車は出て行く。列車には標識された日の丸の旗が點々に刻々と錦州方面の情報を耳にしつゝ列車は北寧線をまつしぐらに錦州、と急ぐ。間もなく列車が停車した。見れば巨流河だ。列車司令部のドアがあいて六尺豐の壁をつくかと思はれる將校が入つて來た。龍川部隊の將校だ

『……守備隊長です。閣下には御苦勞です……』

ついで守備隊報告あり二、三分にして敬禮して立去る。列車は再び進行する。われ〳〵にとつてはもつてこいの話相手だ。師團長が聞くより早くこちらが

＝全身耳と＝なつてゐる。

巨流河——曾つては郭松齡が最後の戰ひ跡であり、我軍が無數に戰ひたる兵匪に荒された陣地の跡だ。數日前兵匪に放火された焼跡のバラックの兵舎を遙に見ながら列車は新民に着く。流石はこゝは東北軍が陣營を置いただけに街は廣い。支那人二萬、内地人三百人といふ街は死の樣に沈默してたゞボンヤリ空に煙つてゐる。これこそまさしく戰禍の跡だ。土匪の跳梁をうけたが内地人はみな逃亡したあとであつた。室師團長は下車した。土匪銀軍は驛に出迎へてゐた。二人の堅い握手、總ては言外に溢れた感激と感謝があつた。

『よく來てくれました』

『よく守つてくれた』

驛下には新民の家族が低く蹲つたる平原にうづくまつてゐる。驛前に並んでゐる五、六臺の運搬車の上には

＝家財道具＝がいつぱい。支那人娘を間に四十位の夫婦が蹲まつてゐる、背の低い滿洲馬は動かうともしない。たゞぽんやり支那娘が驛の新民街を見るともなく眺めてゐた

櫻井忠溫氏 室中將の紹介で相識る 中尾本社局長懇親の仲

二

列車に打乘つたときから記者は向側の座席に眞近く膝を接して坐つてゐる黑のオーバに黑のロイド眼鏡をかけた五十年配の洋服男に妙に關心をもつてゐた。櫻井忠溫氏（?）ではないか？記者の第六感は早くからそれを感じてゐたのだが……とう〳〵解決の時が來た。新民を列車が出て間もなく室師團長がわれ〳〵の座席にこられた

『君のために乾杯しよう』といひ乍ら『角ブドー酒の一カップを與へつゝその洋服男の斜向に（私の隣）腰をおろしたと見るや『やあ』といふなり短刀直入……『我軍の強い三つの根本理由がある、一は必勝の信念、二は兵隊が凡て現役兵なること、三は今の若い將校が劍道に上達してゐること』

三つの強さを述べながら

＝師團長は＝兩手で竹刀の振り方を示した。これに對しその男は大きく笑ひながら……『滿洲問題？これ以上の國土經營は未曾有のことだ、今後とも恐らくないでせう』……と窓外なる漠々たる枯野の平原を指差した、師團長はそれに心よくうなづいてゐる、間違ひはない、櫻井閣下だ。肉彈の御主人だ。記者は思ひ切つて名刺を差し出した。『京城日報は滿洲事變でよく働いてくれるよ』師團長紹介の光榮だ、櫻井閣下は心よく記者の勞を慰めてくれた。

『中尾君はゐるか』

『編輯局長ですか』

『……』

『じつは局長の紹介狀をたくさんもらつて來て居ります』

『よろしく傳へてくれ給へひよつとすると京城に寄るかもしれん』

『どうぞ來て下さい。そして閣下の見られた滿洲事變を朝鮮の人々に聞かして下さい』

『有りがたう……』と云ひ乍ら櫻井閣下は記者の名刺の裏に一句をかいてくれた。

……このあたり
激戰の跡や
枯野原

行く窓に映ずる遼河の曠原を見守りながら日露戰爭當時以來とつたことがないといふ繃帶した右手で滿洲スケッチを描かれた。

三

白旗堡は流石に激戰の地。いま修理したばかりなのだらう。破壞された鐵道鐵橋の破片が

＝散亂して＝ゐる。

支那人の姿は一人も見えない。間もなく奉天から陸軍飛行機が飛んで來た、守備兵が一散に野つ原に駈けつけていつた。廣い青空に向つて獅子のやうに兩手をかざす。飛行機は幾回となく旋回した。次第に守備兵の頭上近く舞ひ下つて來た。二百米——一百米。やがて赤色の通信筒が投下された。錦州情況だ。いま新村旅團は大凌河の線を越えて双羊甸に居る。多門師團は溝幇子にゐる……といふ知らせであつた。

四

往くところ北寧線には兵匪の姿らしきものは一人だに見えない。たま〳〵支那人の姿を見れば農民の如く立ち働いてゐる姿である。いたつて平穩。それに今日は滿洲では珍しいほどの温かさであつた

（裏面に續く）

武漢危機迫る

共產軍武長線に迫る

【漢口五日發電】大部隊の共產軍は湖北の通山に侵入しその勢ひ猛烈なる爲め該縣駐屯の謝彬の第八十五師は戰はずして同地を拋棄し武長線に迫りつゝあり武漢の危機は逼迫してゐる

寫眞說明（河野班長撮影）

【1】錦縣驛頭の室〇〇〇師團長

【2】溝幇子驛頭に於ける出迎への第〇師團長多門中將と第〇師團長室中將の握手（中央多門中將・左室中將）

【3】新民屯戰場を見る（後方に市街を見る）

【4】師團司令部に充てた錦州天泰司令部と司令部

(一面の續き)

佐藤記者記事

しかし零下十五度はくだらない。遥に地平線を見れば太陽はもう沈みかけてゐる。午後四時だといふに陽は『地平線下』に没しつゝある。温かゝつた日もはや暮れて寒さは次第に夕とゝもに押しよせて來た。

五

午後六時溝幇子に入つた。嶺村旅團の一番乗りに續いて多門師團の入城した激戰地だ。現在は臨時司令部がある。多門師團長が居るのだ。多門第○師團長は溝幇子驛に室第○○師團長を迎へた。兩師團長の石の樣な堅い握手ガッチリ組んだ二つの手よ。そして最初に出た言葉は只一言……それつきり『御苦勞』……これであつた。あゝ何たる兩雄の意味深き挨拶であつたらう。『何處の新聞か』河村寫眞班長をかへり見て多門師團長は尋ねた。『京城日報です』『御苦勞』ニツコリ微笑をたゝへて再び室師團長に對す。挨拶終つて『室師團長』以下旅團は多門師團長の自動車に同乘して溝幇子驛後方の臨時司令部へ(戰鬪司令部)に赴けた。かくして司令部會議の結果室第○○師團司令部及び依田旅團の一部を乘せた錦州一番乘りの列車は溝幇子驛に停車し三日朝を迎へることになつた、溝幇子驛のすぐ彼方には白煉瓦の驛が燃えてゐる、聞くと兵匪が三十日火をつけて逃げたがそのまゝの煉瓦なので未だに燃えてゐるとのことであつた、消しては如何と聞くと呑む水さへないのにどうして消されるかとそのまゝくすぶるにまかしてゐた、列車の窓から炎々と燃え上つてゐる溝幇子驛!それを取り圍んで多門師團部下の兵士が火盛つてゐる、やがて『情況が入』つて來た

一、錦州に敵兵を見ず、敵は西方地區に退却した

二、錦州軍は日本軍との戰鬪を忌避しつゝある

三、彈藥は缺乏し軍兵の供給は四月以上支持つてゐない

四、兵匪の三分の二は飛散し馬賊と化して四散した

五、大凌河田の支那人は日本軍の錦州入城を歡迎し歡迎準備中である

六、支那人一般は日本軍の來軍により安心してゐる

六

溝幇子驛の列車内に二日夜を明かした室第二十師團司令部及び依田旅團は三日午前七時溝幇子驛を出發した。間近に錦州を控へて列車内は早朝來から錦州入城の話で大持てであつた。この歷史的入城には何人も大きな關心をもつてゐた。かくして先發隊嶺村旅團は午前九時『錦州城に』入城した。錦州入城の情報が一度び室第○○師團司令部に入るや司令部は知らず萬歲の叫びをあげた、室中將の得意なる顏●かくして錦州城掃蕩のうち室第○○師團司令部は堂々午前十一時四十分錦州城に入

壊した、あゝ何たる光榮ぞ、龍山…は完成された、朝鮮部隊の要害して幾多國際的問題と匪賊の跋扈に栄光あれ。」
…隊により錦州掃蕩をなし室第○○[redacted]よ、錦州入城、九月十八日錦州を押しつけつゝこゝに錦州入りは
○師團司令部によつて錦州城一番乘突發してより實に百八日目に決行されたのであつた、朝鮮部隊

日本軍を信頼し 安じて業を勵め

錦州入城の室○○師團長 四日布告を發す

【奉天四日午後五時十分發電通至急報】四日午後二時錦州城内の司令部に入つた室中將は直ちに左の如き布告を發した

布告

餘命を保てる東北軍閥は依然遼西地方に於て野蠻殘忍の手段を弄せり、日本軍は既に遼西一帶の軍閥匪賊を掃蕩せり、日本軍が今回入城し遼西一帶の地方に駐劄する所以は良民を保護し其の民政を厚くする以外に他意なし、須らく日本軍の保護に信頼し士農工商の別なく總てその所に安んじ互にその業を勵むべし、若し本軍の命令に不服なるものある場合は軍法に依り嚴罰すべし、此の旨特に聲明す

昭和七年正月四日

大日本第○○師團長　室　中　將

刄に血塗らず― 功を收めたは滿足

「各將兵本分を誤るな―」 本庄司令官部下軍隊に訓示

【奉天四日發電】錦州軍權逃走し遼西匪賊大討伐一段落を告げたるにつき本庄軍司令官は四日左の如く部下軍隊に訓示した

錦州軍閥の指揮統制する兵、匪賊徒は正規兵と相混じて擾亂を事とするや氷點寒北の曠野に庶民その居を失ひ飢に泣き其の慘憺を極むるのみならず、軍自體の自衞をも危くし南滿鐵道沿線又危殆に瀕するに至れり、軍は過般帝國政府の意を體して敢然起つて遼西一帶の地域に向ひ討伐を開始し其の本據を衝きて禍根を一掃するに決せり、爾來我將兵よく酷寒を制し困苦に堪へ更に新鋭の部下を加へて堂々邁進を開始するや、匪化せる軍權並に賊團は忽ち威武に恒して敵退を開始し庶民歡呼して皇軍を迎ふるに至る、所謂刄に血塗らずして功を收めたるものにして本職の深く滿足するところなり、惟ふに滿蒙の今後は潑剌たる建國の大業にかゝりて存す、茲にその勞苦を多とす、これを容易ならしむるは一に治安の回復を完うするに在り、これがため軍は掃匪を行ひ以つて民心の安定を圖り、安寧秩序を維持するため廣大なる地域に兵力の分散を忍ばざるべからず、從つてその任務を達成するため一層の困難に際會することを豫想するを要す、就中向後諸般の行動は直接庶民の休戚に關しその實生活に關るゝもの多きを以つてよく特異なる民情風俗の機微を察知し、悅服して軍に信據する如く努めざるべからず、これ畢竟滿蒙問題解決の根本機軸を形成するものといふべく、一兵の擧措と雖もその影響は極めて甚大なるものあるを銘心せざるべからず、殊に駐屯部隊は特に軍紀風紀を緊肅にし士氣を振ひ團結を固くし獨斷を堅固ならしめ、將兵一體然も節度を保持するに非ずんば動もすれば意外の不祥を生じ或は弛緩を來すことなきを保せず、我將兵よく本職の意を體し相俱に切磋を加へ畏くも上大元帥陛下の股肱たるの信頼を忝うし、下擧國一致並に在滿衆庶の支持深きを自覺し事變以來贏ち得たる赫々たる軍の名譽と光輝とを發揚し益々精强の矜持を向上し、以つて有終の美を完うせん事を期せよ

昭和七年一月四日

關東軍司令官　本　庄　繁

山海關以東に 民政自治

室師團長宣布

【錦州四日發電】室師團長は依田、嶺村兩旅團をして山海關以東に潜伏せる混雜合地の兵匪討伐に當らしむると共に、山海關以東に民政自治を布く旨四日宣布した

匪賊討伐を終へ 多門師團長歸奉

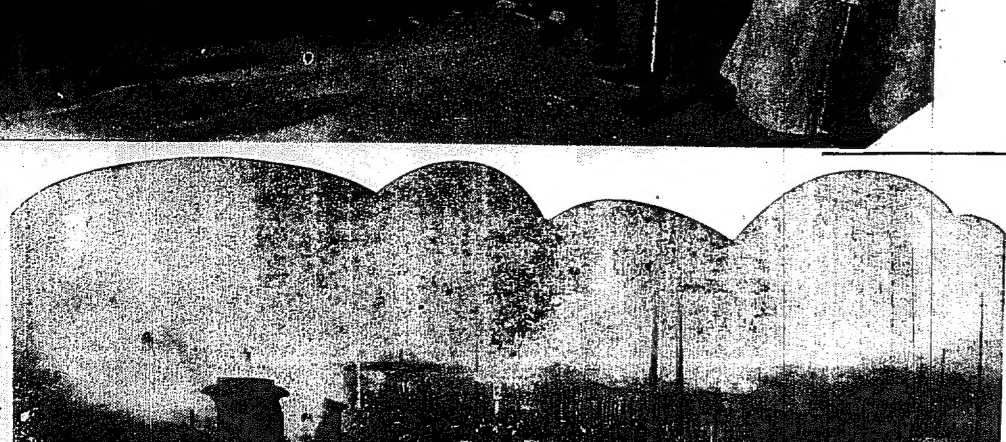
「余りの弱さに飽氣なかつた」 多門師團長語る

【奉天五日發電】十五日間に亘る遼西一帶の匪賊大討伐を終つた多門師團長は幕僚並びに部下の○○○名及び奉天驛屯○○聯隊○○名を率ゐ五日午後一時十五分ホームを埋めた數百名の奉天官民の破れる樣な萬歲の聲に迎へられて奉天驛に凱旋した、多門師團長は終始微笑を湛へつゝ官民の歡迎に答へ驛頭に出迎へた二宮滋兵司令官、岡村參謀長、森島領事等と挨拶を交し直に軍司令部に入つた、麾下の精鋭○○○名は十日連夜强行軍で顏は眞黒くひげぼうぼうと眞黒になり兎の毛の防寒具を身につけて意氣軒昂、不眠不休の戰鬪を續けたものとは思はれぬ程の元氣で一先づ兵舍に入つた、多門師團長は討伐完了につき『錦州一帶の匪賊が余りにも弱く飽氣なかつたことだ』と語つた

日本軍の行動は 當然で斯くあるべき事

ローマ法王勅選獨逸クラウス博士 奉天よりの外人放送

【奉天五日發電】ローマ法王勅選、上智大學教授獨逸經濟學博士ヨハネス・ベ・クラウス氏は先般來滿洲問題につき研究中であつたが、今回日本軍の執りたる行動は當然のことであり、又滿洲は斯くあらねばならぬとの意見を公表すべく五日夜九時十分から五十分間に亘り『經濟學者の見たる委任統治としての滿洲に就いて』と題し、奉天無電臺より放送することゝなつた、氏は滿洲問題の權威者であり實地に現下の滿洲を研究した外人の口よりそのまゝ公表されるのは之が初めてゞある



【5】室第○○師團長と櫻井忠溫氏
【6】室師團長以下我軍の錦州入城(この分電通)
【7】我軍の入城を日章旗を掲げて歡迎する錦州市民(この分電通)
【8】我軍錦州驛に入城(この分電通)